

第四章 都市交易が農地の改良に果たした役割

商業と製造で栄えた都市の拡大と富の蓄積は、その国の土地の改良と耕作を、次の三つの方法で後押しした。

第一に、都市は国内の一次産品に、広く、しかもすぐ売れる市場を開き、耕作の拡大と土地改良を促した。この恩恵は自国内にとどまらず、取引相手にも多少は及んだが、最大の受益者は地の利を占める自国である。輸送費が軽いぶん、商人は生産者により高く支払いながら、消費者には遠隔地の品と同程度の価格で供給できた。

第二に、都市で蓄えられた富は、売りに出た土地（しばしば未耕地）の取得に向かった。商人は郷紳への転身を望み、いったんその地位に達すると、すぐさま改良の推進役となった。商人は、利潤を生む事業に資金を投じ、やがて利益がついて戻ってくることに慣れている。他方、郷紳は多くの場合、資金を主に消費に使い、一度使ったお金が戻ってくるとはほとんど考えない。ここに気質と事業判断の差が生じる。商人は、費用に見合う地価上昇が見込めれば、改良に大胆に大資本を一挙投入するが、郷紳は資本があっても同じ投資に踏み切りにくく、改良しても多くは年々の収入からの貯えで賄う。未

改良地を背後に抱く商都に暮らした者なら、商人の改良が郷紳よりはるかに精力的であることを、幾度も見たはずである。しかも、商業が日々培う秩序・儉約・注意深さの習慣は、改良事業を収益と成功に導く、確かな土台となる。

第三に、そして最後に、商業と製造業は、かつて隣人との絶え間ない小競り合いと、上位者への隷属に甘んじていた農村社会に、しだいに秩序と善政を行き渡らせ、個人の自由と安全を根づかせた。見過ごされがちだが、これは諸効果のうちで最も重要であり、筆者の知るかぎり、これを明確に指摘したのは哲学者ヒュームただ一人である。

対外貿易や高度な製造業を欠く国では、大地主は耕作者の生活維持分を超える余剰を他と交換できず、結局は屋敷での田舎風の大盤振る舞いに費やした。余剰が百人、千人を養えるほどなら、実際にその人数を抱えて養うほかに使い道はない。ゆえに主の周囲には常に多くの被官・従者が集まり、彼らは自らの糧に見合う反対給付を持たないため主の施しで暮らし、賃金で動く兵士が君主に従うのと同じ理由で主に従属した。欧州で商業が広がる以前、富者のもてなしは、君主から末端の小男爵に至るまで現代の想像をはるかに超えていた。ウェストミンスター・ホールはウィリアム二世の食堂として用いられ、しばしばその広さでも足りなかったという。トマス・ベケットは大広間の床に季

節ごとに清潔な干し草やイグサを敷き、席を得られない騎士や従士が床に腰を下ろしても晴着を汚さないよう配慮したが、これも豪奢の一例と見なされた。大ウオリック伯が各領地で日々三万人をもてなしたという言い伝えもある。数字は誇張にせよ、規模が並外れていたことは確かである。こうした供応は、つい近年までスコットランド高地の各地にも見られ、商工業に疎い民族社会では通例の光景であった。ポコック博士は、家畜を売りに来たアラブの族長が往来で食事を取り、通行人や乞食にまで声をかけて宴に招き入れるのを目撃したと記している。

土地占有者は、大地主の供従とほとんど変わらぬ従属関係に置かれていた。農奴でなくとも多くは任意小作で、土地がもたらす生計に見合わぬわずかな地代しか納めない。スコットランド高地では、家族を養える土地の年貢がクラウン銀貨一枚やハーフクラウン一枚、または羊・子羊一頭で足りるのが、つい近年まで通例であり、今なお例がある。しかも現地の貨幣価値が特別に高かったわけではない。所領の余剰を所領内で消費せざるを得ず、消費者が従者同然に主に縛られている社会では、屋敷から離れた場所の一部を消費させるほうが、屋敷の食客や家中が過大化する煩わしさを避けられるぶん、地主には都合がよかった。名目地代にわずかな上乗せで一家分の土地を預かる任意小作は、

召使いと同程度に地主に依存し、ほとんど無条件に命令に従う。地主は従者を屋敷で養うのと同じく、小作には各戸で糧を与えた。いずれの暮らしも主の施しに支えられ、その継続は主の一存に懸かっていた。

この体制のもとで、大地主は小作人や従者を当然のように従え、その権威が古のバロン権力の基礎となった。彼らは領民に対して、平時は裁き手、戦時は指揮官であった。直轄地では住民の力を結集して、一人の不法者ですら抑え得たから、秩序と法は保たれた。かかる実効的権威は他にはほとんど存在せず、とりわけ国王には欠けていた。当時の王は実質的に国内最大の地主にすぎず、共通の外敵に備える名目で他の大地主から一定の敬意を受けるのみであった。武装し相互扶助に慣れた住民のいる大領内で小さな債務を取り立てるだけでも、王が単独で強制すれば、内戦鎮圧に匹敵する労力を要した。

このため王は、国内の司法の大半を実行力ある者（バロン）に委ね、民兵の指揮もまた、民兵が従う者に託した。

領主の領域管轄を封建法の所産とみなす見方は誤りである。民事・刑事の最高裁判権、兵の動員、貨幣の鑄造、住民統治の内規制定といった権能は、欧州で「封建法」の名が知られる以前、何世紀も前から、大土地所有者がアロディウム（無封領）の権利として

保持していた。イングランドでも、ノルマン征服前のサクソン領主の權威は、征服後のノルマン領主に劣らず、封建法がコモン・ローに組み込まれたのは征服後である。フランスもまた同様で、封建法導入以前から大領主がアロディアルに広い権限を有していたことは疑いない。これらは、先に述べた土地所有と社会慣習の構造から自然に生じた帰結であり、その因果は後世にも見て取れる。たとえば、スコットランドのロキャバー地方のロッヒールのキャメロン氏は、つい三十年ほど前の人だが、何の法的な任命も受けることなく（王から強い裁判権を与えられたレガリティ領主でもなく、王から直接土地を与えられた直臣ですらなく、アーガイル公の配下の家臣にすぎなかったが）、自領民に対し日常的に最高の刑事裁判権を行使したという。手続こそ整っていなかったが、概して公平で、当時の治安維持には不可欠であったのだろう。年額地代は五百ポンドに満たなかったが、一七四五年の反乱には自家の人々八百人を率いて参加した。

封建法の導入は、無封の大領主の力を強めるためではなく、それを抑えるための施策であった。王から末端の小地主にいたるまで、段階的な従属関係を整え、夫役やさまじまな義務を課した。所有者が未成年のあいだは地代と経営が直上の主に移り、その結果、大領主の取り分は実質的に王の手に集まった。王は後見人として被後見人の扶養と教育

を担い、身分にかなう範囲で婚姻を取り計らう権利も与えられた。とはいえ、この制度が王権を強め大領主を弱めはしたものの、混乱の根である財産制度や慣習を十分に改めることはできず、農村に秩序と善政を根づかせるには力不足であった。統治は相変わらず頭が弱く末端が強すぎ、その過剰な末端の力が、頂点の脆さを生み続けた。封建的な上下の秩序が整ってからも、大領主は互いに、しばしば王に対してさえ戦いを挑み、農村は暴力と略奪と混乱の場であり続けた。

封建の強権や暴力では成し得なかった変化を、対外商業と製造業の静かな作用が、やがて実現した。その結果、大領主は、土地の余剰をまるごと換金でき、しかも小作人や被官と分け合うことなく、自家で消費できる品を手にするようになった。「自分のためのすべて、他人のためには無」という卑しい心構えは、いつの世にも権力者につきまとう。ゆえに、地代の価値を自分だけで使い切る手段を得た途端、彼らは分配の意欲を失った。たとえば、ダイヤのバックル一組という取るに足らない贅沢のために、千人の一年分の糧に当たる代価を投じ、千人の暮らしを支えることで得ていた重みや権威までも同時に投げ捨てた。そのバックルは自分だけの所有物で、誰とも共有されない。これに対し、従来の支出では、その価値は少なくとも千人と分かち合われた。この違いが選択

の決め手となり、こうして彼らは幼稚で卑俗な虚栄を満たすために、自らの力と権威を少しずつ切り売りしていったのである。

対外商業も精緻な製造もない国では、年一万ポンドの収入を持つ者は、その多くを千世帯規模の扶養に回すほかなく、彼らは必然的にその支配下に入る。他方、現代の欧州では、同額をまるごと費やしても、直接養えるのは二十人にも満たず、実際に命じ得るのはせいぜい十人ほどの召使いで、支配の対象と呼ぶには心もとない。それでも間接的には、昔と同じかそれ以上の人数の生活を支えている可能性がある。彼が全収入と引き換えに得る貴重な産物は量こそ少ないが、その採取や加工には多くの職人が関わり、価格の高さは彼らの賃金と直近の雇用主の利潤を映している。ゆえに、その支払いは、それら賃金と利潤の間接的な支払いに等しく、結果として労働者と雇用主の生計に寄与する。ただし、一人ひとりへの寄与はきわめて小さい。ごく少数には一割に達しても、多くは百分の一にも満たず、千分の一や万分の一にとどまることもしばしばである。したがって、彼は全体として広く人々の生活に寄与しながらも、人々は概して彼がいなくても成り立ち、少なからず独立している。

大地主が地代で自家の小作人や従者を養えば、各人は自分の家の者を丸ごと支えるこ

となる。だが、その地代を商人や職人への対価に充てれば、田舎風のもてなしに伴う無駄がないぶん、総体では以前と同等かそれ以上の人々を養い得る。とはいえ個別に見れば、各大地主が特定の一人の生活に占める割合は、しばしばごく小さい。商人や職人は、一人の庇護者ではなく数百・数千の顧客の注文で生計を立てるゆえ、多くに恩は感じて、誰か一人に全面的に依存することはない。

大地主の私的消費が膨らむにつれ、家人や被官は段階的に減らされ、ついには解かれた。同じ力は過剰な小作にも及び、農場は統合されて拡大し、当時の未熟な耕作と改良の水準で回せる最小限の耕作者数にまで絞られた。人口減少を嘆く声があっても、この流れは止まらない。余計な口を減らし、農場の全価値に見合う地代を厳格に取り立てれば、地主の手元にはより大きな余剰が残り、商人や製造業者はそれを私的消費へ向ける器を、たちどころに用意した。この過程が進むと、地主は現状の改良度を超える地代引き上げを望むようになり、小作が応じたのは、投じた改良費を利益をつけて回収できるだけの年期の占有保証という、ただ一つの条件だけであった。見栄に金を惜しまぬ地主はこの条件を受け入れ、ここに長期賃貸借の慣行が生まれた。

地代が土地の全価値に見合うなら、任意小作人であっても地主に全面的には依存しな

い。両者の金銭的利益は対等であり、小作人が地主のために命や財産を賭する理由はない。まして年期の長いリースを得た小作人は、完全に独立している。地主が期待できるのは、契約に明記された義務か、国で周知の一般法が課す義務にとどまる。

小作人が独立し、被官や食客が整理されたことで、大地主は司法の平常な運用を妨げたり、国内の安寧を乱したりする力を失った。彼らは、飢えのためではなく、豊かさゆえの気まぐれから、生まれながらの権利を子どもの玩具のような小間物と引き換えに手放し、その結果、都市の堅実な市民や職人と同じくらい取るに足らぬ存在へと退いた。こうして、都市だけでなく農村にも正規の統治が行き渡り、どこでもその運用を乱せるほどの力をもつ者はいなくなった。

一言付け加える。商業が盛んな国では、父から子へと大所領を長く伝えてきた旧家はまれである。これに対し、商業の乏しい地域、たとえばウェールズやスコットランド高地では珍しくない。アラブの歴史が系譜を中心に述べられ、タタールのハーンの史書が欧州語訳でも多くを系図が占めるのは、旧家の多さを物語る。富裕者の支出が、養える人数の扶養に限られる社会では、家計は破綻しにくい。慈善心があっても、身の丈を超えて人を抱え込むことはないからである。これに反し、収入の大半を自分のために使え

る社会では、虚栄と自己愛に歯止めが利かず、出費は膨らみやすい。ゆえに商業国では、散逸防止の法律があっても、富は同一家に長くとどまりにくい。素朴な社会では法律がなくとも家に残りやすい。さらに、タタールやアラブの遊牧社会のように、財がそもそも消耗的で貯めにくい場合には、その種の規制を施す余地すらない。

公共の幸福を大きく変えたのは、公益に無関心な二つの身分であった。大地主を突き動かしたのは幼稚な虚栄心だけであり、商人や職人はより現実的ではあったが、もっぱら私利を追い、「稼げるところでは必ず稼ぐ」という行商の原則に忠実だった。いずれの側も、自分たちの愚行と、他方の勤勉とが重なって大きな変革を生むことを、知ることも予見することもなかった。

このようにして欧州の多くでは、都市の商業と工業は、田園の改良や耕作の結果ではなく、その原因・呼び水として働いてきた。

しかし、商工が先に進むこの順序は、自然の流れに反するため、進展はどうしても遅く、不確実である。商工に大きく依存する欧州の歩みの鈍さは、農業を基盤として急速に伸びる北米植民地と比べれば明らかである。欧州が人口を倍増させるには五百年を要するのに対し、北米のいくつかの植民地では二十―二十五年で倍増する。欧州では長子

相続や各種の永代拘束が大土地の分割を妨げ、小規模な自作農の層を瘦せさせてきた。だが、自分の小地所を知り尽くし、愛着をもって丹念に耕し、ときに装いも施す小地主こそ、ふつう最も勤勉で賢明な、成果ある改良者である。同じ規制は土地の流通も細らせ、買い手の資本が常に売り物を上回るため、価格は独占的な水準に傾きやすい。純地代は購入資金の利子にも届かず、修繕などの負担も重いため、小さな資本で土地を買うことは、欧州のどこでもきわめて不利である。引退後の安泰のために土地に資金を置く中産や、他の収入のある専門職が貯えを土地へ移すことはあっても、若者が二千〜三千ポンドを小地所の取得と耕作に投じれば、独立して幸福な暮らしは望めても、商業や他の職で得られたかもしれない巨富や栄達は諦めねばならない。しかも、地主になる望みの薄い者は、小作そのものを嫌う。結局、売りに出る土地の少なさと高値とが、本来なら耕作や改良に向かったはずの多くの資本を遠ざけている。他方、北米では五十〜六十ポンドで開墾に着手でき、未耕地の購入と改良は、小資本にも大資本にも最も有利な投資であり、その国で富と名誉を得る最短の道である。しかも、この種の土地は「自然収益の価値」を下回る、ほとんど無償に近い価格で手に入るが、欧州のように全土が古くから私有化された国では望めない。もっとも、相続時に土地を子ども全員で平等に分け

る慣行があれば、大所領の多くは売却に回り、供給の潤沢によって独占価格は崩れる。純地代は購入資金の利子に近づき、小資本の土地購入も、他の投資と同程度に有利になっていくだろう。

イングランドは、肥沃な土壌、国土の割に長い海岸線、そして内陸深くまで通じる可航河川の多さという自然の利に恵まれ、対外商業や遠隔地向け製造、さらにそれらが呼び起こす改良の舞台として、欧州でも屈指の適地である。エリザベス女王即位初期以来、議会は商工業の利益を重んじ、法制度全体も（オランダを含む諸国の中で）最も強い追い風となった。その結果、商業と製造は着実に拡大した。他方で、耕作と土地改良も進んだが、その歩みは遅く、商工の急伸には及ばない。多くの土地はエリザベス期以前にすでに耕地化されていたと見られるものの、なお未耕地は少なからず残り、耕地の大半も本来の潜在力には達していない。しかも英法は、商業保護という間接策にとどまらず、農業への直接支援も設けた。すなわち、凶作時を除く穀物輸出の自由と奨励、平時の余裕期における外国産穀物への実質禁輸入税、生体家畜の通年輸入禁止（近年はアイルランドのみ一部解禁）である。これにより耕作者は、パンと精肉という国内需要の二大必需について独占的な地位を与えられている。これらの優遇は、根本では見かけ倒しの面

もあるが、立法意思が農業重視にあったことは明白である。とりわけ重要なのは、ヨーマン階層が、法の許す限り最大の安全・独立・尊敬を保障されている点である。ゆえに、長子相続が行われ、什一税を課し、法の精神に反しながらも永代拘束が一部認められる国々の中で、イングランドほど農業を手厚く奨励し得る国は他にない。それでも耕作の現況はこの通りである。もし法律が、商業発展による間接支援以外に直接の梃子を与えず、ヨーマンの地位も他の欧州諸国並みに据え置かれていたなら、いまはどうなっていただろうか。エリザベス治世の幕開けから二百余年、ほぼ一世代の繁栄が一巡するほどの歳月が過ぎた。

フランスは、イングランドが商業国家として台頭するより約一世紀も前から対外商業で重要な役割を担い、同時代の基準でも、シャルル八世のナポリ遠征以前から海運・海軍力は強大であった。それにもかかわらず、耕作と土地改良の水準は概してイングランドに及ばず、法制上の直接的な奨励もイングランドほど手厚くはなかった。

スペインとポルトガルの欧州向け通商は、輸送の多くを外国船に委ねながらも規模はきわめて大きい。他方、植民地との交易は自国船で行われ、植民地の富と広大な版図に支えられていっそう巨大である。それでも、遠隔市場向けの本格的製造業は根づかず、

国土の大半はいまだ十分に耕されていない。付け加えれば、ポルトガルの対外交易の歴史は、イタリアを除く欧州主要国の中で最古級に属する。